更年期以降・男vs女

しゅくみね内科
祝嶺　千明

新年号の干支随筆では、死亡広告に関心を持つようになったことや友人の死に触れ、これからの年のとり方を考えていきたい旨を書かせて頂きましたが、今回も依頼がありましたので拙文ですが挑戦します。

リチャード・ドーキンス先生は利己的な遺伝子という本のなかで“哺乳類の場合、自分の体内で胎児をそだてるのも雌、生まれた子供に乳を与えるのも雌、子の養育と保護の重荷をしょいこむのも雌”であるため種の存続において“雄はいっそう「消耗的な」存在であり、雌はいっそう「貴重な」存在”といっている。

そのためか女性は、種として生物学的優遇措置が施されているようで、女性ホルモンに守られているという話は有名であるが、なんでも体内の抗酸化物質も女性の方が男性よりも高濃度であるという。抗酸化サプリメントを摂ることで男性の全癌罹患率が低下したとのデータがあり男性は積極的に抗酸化物質を摂ったほうがいいらしい。

その優遇措置が解除される更年期、外来で更年期障害の方々をみていると、男性に比べると女性の更年期障害はつらそうである。

最近こられた患者さんの表現を借りると、“順風満帆の航海中、突然嵐が来て荒海の中に放り出されたような苦しさ”であるという。

しかし、私にしてみると更年期を乗り越えた後の女性は、まるで変身物のヒーローのように生命力がアップ。各段に潔く、そしてたくましくなるように感じる。

更年期をクリアーした70歳代女性の患者さんの話。

折からの韓流ブーム、ビデオ屋さんからビデオを借り、徹夜もいとわず毎晩見まくっているという。特に、○○様の話しをする時の彼女の目は宙を漂い、女学生のよう。見始めたら煩雑な家事仕事は忘却のかなたへ。しばらく忘れていた若きころの純粋なときめきに、さめざめと涙するという。傍にいる旦那さんを尻目に。

その彼女次に来院した時には趣味が高じ、韓国旅行に行くという。私が「いいですね。ご主人もご一緒に？」と聞くと、「まさか！女友達とさー。旦那と行ってもおもしろくないのに。ははは！」と笑い飛ばされた。

別の62歳の女性は、結婚以来男所帯の家事の切り盛りに明け暮れてきた。更年期には親の介護も重なり、うつ病になり苦しんだという。その彼女、思い余って旦那さんに「私より2年は早く死んでね。せめてその2年間は家事の束縛から解放されて旅行とかして死にたいから。」と思いの丈をぶつけた。それを聞いた旦那さん、あわてて旅行に連れて行ってくれる約束をしてくれたとのこと。

もしかしたら更年期以降は、女性にとり旦那の存在は家事と同じ類のストレスのひとつではなかろうか。

このところ熟年離婚が増えているというが、三行半を突きつけられるのは男性が圧倒的に多いらしい。離婚後の男性は精彩を欠くが、女性は水を得た魚のように生き生きとしていると聞く。

外来で感じることだが、男性の一人やもめは健康度が低いことが多い。男性の一人暮らしは短命だが、女性の一人暮らしは長生きだそうだ。

外来の待合室をみていると、女性と男性では待ち時間の過ごし方が違う。

女性は知らない者同士であっても、気軽に声をかけ和気あいあいとしている。一方の男性はというと、しかめ面をして新聞を広げ誰も自分には話しかけるなという雰囲気が漂っている。

比較的女性は新しいことにも挑戦するし、物事の楽しみ方を自然体で知っているなと思うことがある反面、男性は世間体や履歴に固執する

ためか自分のテリトリーを守ろうとする傾向があるように思える。

最近母の日があった。いつの時代も母の日は盛大である。なんと言っても華がある。母の日があっての父の日という感じである。母の日のプレゼントは選択肢が多くどれにしようか選ぶのに困るが、父へのプレゼントはどうしようか困りものである。気持ちが大事とは思うが、とにかくオプションが乏しい。

わが家は、女房に娘が2人の4人家族。

女房は子育て時代は哀れなくらいやせていたが、最近ははむちむちと肉体的にも精神的にも充実の一途をたどっている。PTA関係を始めとして友人も幅広い。

一方の自分は職場と家の往復に明け暮れ、年齢とともに筋肉量が減り体格がしょぼくなってきている。

女性の社会進出が当たり前になった今の時代、人生の後半においては生物学的にもそうかもしれないが、社会的存在としての男性は女性に比べ先細りの感があるのでは。

やはり男は消耗品？！

私自身、更年期といわれる年齢を目前にして、まだまだ気持ちだけは一家の黄金柱、ナイトの精神猛々しいつもり。ではあるがこの先、ますますお世話になるかも知れない家庭や職場の女性たちに見習い、生き方上手にならねばと思う今日この頃である。

与論島二人旅

白井クリニック
白井　和美

ゴールデンウィークに息子と二人で与論島に旅行した。

ダイビングや、マリンスポーツなどが目的で、往復はフェリーにした。那覇港から本部港を経由して約5時間。最新設備を備えたフェリーでの船旅は、快適そのものだった。

与論島は、かれこれ20年位前には、若い女性憧れのリゾートとして注目されたが、今もダイバーの間では沈船スポットなど根強い人気がある。

ホテルに着き、すぐにビーチへ向かった。マスク、シュノーケル、フィンの3点セットを着けて早速海に入った。遠浅のビーチは透明度もよく、波も穏やかだが、寒い。例年になく水温が低いようだ。泳ぎ始めたが、寒さに慣れるまでしばらくは水中で震えていた。沖縄に比し魚は色彩的に地味に感じたが、リーフに集まる魚影は豊富だった。本島では見られないような20～30センチはあるナンヨウブダイやもんがらかわはぎがすぐ近くに寄ってきた。チョウチョウウオも人を恐れる様子が無い。べらやおじさんなどおなじみの魚達も私のマスクをつつきに来た。1時間くらい夢中になっていたが、寒さに我に返り、海から上がった。本来なら、バナナボート、マリンジェット、カヌー、ウェイクボードなどのマリンスポーツメニューがあるが、寒さのせいかショップは開店休業だ。寒がりの私にはダイビングは無理という息子の一言で、急遽全ての予定が変わってしまった。

そこで、島内観光をすることにした。島は小さく、車を使うとあっという間に一周してしまう。高台になったところに、サザンクロスセンターがあった。与論島の歴史、芸能、物産などを紹介する施設で、伏龍をかたどった面白い形をしている。5階の展望室からは、仰向けに寝たメタボなお釈迦様のように沖縄本島が見えると案内係りの女性が教えてくれた。驚くほど近くに沖縄本島が見える。先々で、親島からようこそといって歓迎されるわけがわかった気がした。この隣には、与論城石垣跡が残り、地主神社（とこぬしじんじゃ）の境内には子供相撲の土俵が作られていた。子供の日に試合があるという。我がメタボな息子は、子供相撲の選手と間違われ困惑していた。

ドライブしていると、彼が島のほぼ中央に、

与論焼きの窯元を発見した。ゆんぬ・あーどぅる焼といって与論の赤土に椰子の葉、海水、珊瑚、ソテツなどから作る自然素材の釉薬をかけて焼いたもので、美しく温かみのある焼き物だ。それぞれの釉薬が、椰子の葉が青色、海水が褐色、珊瑚が乳白色、ソテツが緑色と独特の色を発し興味深い。何組もの観光客が作品を作っていた。各種体験の大好きな息子にせがまれ、私達もそれぞれ、丼、茶碗、杯と好みのものに挑戦した。しっとりとした土の感覚が手のひらに心地よい。晴れていれば、土が乾燥するため時間との戦いになるとのことだったが、当日は曇っていたので、時間をかけてゆっくり作ることが出来た。土をこねているとあっという間に時間がたち、作品にサインをし、後は仕上げをお願いする。乾燥、焼き上げをし、約1ヵ月後には手元に作品が到着する予定だ。無事に到着する日を楽しみに窯元を後にした。

次は、大島紬の織元を見学した。高級・高価な織物として有名な大島紬だが、細かい織の見事さは圧巻だ。ここでも機織体験が出来るという。息子は慣れた様子で好みの機織機を選び、さっさと紬を織り始めた。いつもは隣で見学するところだが、勧められるままに私もやってみた。縦糸はすでに張ってあり、好みの横糸を選んで織っていく。彼は、黒の縦糸にグレーの横糸で、店の人に、「渋いのが好きだねえ」と言われながらもどんどん織っていく。私は、黒とベージュの縦縞に青の横糸で織り始めた。機織には、手と足の動きにコンビネーションが必要だが、若い人はすぐにマスターしてしまう。私は初めのうち手と足がばらばらでぎこちなく、息子にも、店の人にも笑われながら悪戦苦闘したが、慣れてくるとこれが大層面白い。元来、織物に興味があったため、つい夢中になって、普通の倍も織ってしまった。息子は、自分の作品をブックカバーに仕立ててもらうようだ。結構交渉上手で、相談しながら要領よく話を進めていた。初めて見る彼の姿に少し驚いた。

体験後、お茶と手作りのお菓子を頂戴した。コンビニもファストフード店も無い島の暮らしを聞き、お勧めのお土産情報なども教えてもらえ大変参考になった。息子は早くも次回の訪問を約束していた。よほど気に入ったようだが、それは私も同感だった。

子供も中学生になると、親と一緒にいることは少なくなる。今回の旅は久しぶりの親子の時間で、いろいろな話も出来たし、彼の新しい面も発見でき、良い思い出となった。次の訪問が待ち遠しい。

あんやたん

ちばなクリニック
城間　勲

先日の新聞に載っていた「あんやたん展」の記事を読んでいて、ふいに自分の「あんやたん」を思い出した。あまり思いだしたくないことだが、妙に懐かしい気持ちにもなる。大学時代の帰省の時の話である。

それは昭和46年頃のことだった。沖縄はまだ本土復帰をしておらず、県外に出るにはパスポートが必要な時代である。その頃僕は弘前で大学生活を送っていた。本州北端の青森県から沖縄の実家に帰るのは年1回だけ、2月末から3月いっぱい（だったと思う）の春休みの時だった。ほぼ日本縦断に等しい片道5泊6日の旅である。

帰る前日は当然ウキウキしている。半年ぶりに部屋を念入りに掃除する。万年床の下に生えたタタミのカビを拭き取るのも苦にならない。

今なら飛行機に乗ればその日のうちに沖縄に着いてしまうが、30年以上も前の話である。主な交通手段は汽車と船であった。学生が飛行機に乗るなどということは考えられなかった。（あとでそうでもないことを知ったが…。）

弘前を発つのは金曜日の午後に決まっていた。なぜなら土曜日の午前中に東京に着きたい

から。土曜日の映画館はオールナイトである。10数時間も急行列車に揺られてきてうんざりしているのと、できるだけ長い時間東京見物をしたいとの思いで、映画館で一晩を過ごすのがいつものことだった。ホテルに泊まるのはもったいない。その時の映画の内容はほとんど覚えていない。周囲が暗くなると、ものの10分もしないうちに夢の中へ入っていた。翌日は東京駅地下の東京温泉で一風呂浴びて東京見物へ。といっても銀座などの繁華街をうろつくだけのことであるが…。

日曜日の深夜、棒のようになった足で大阪行の普通列車に乗る。運賃が安いうえに昼間の急行列車並のスピードで走るのが魅力だった。とにかく汽車に乗っている時間を短くしたかったのだ。それができなければ眠っていたい。何もしないで10数時間もただ座っているのは耐えられない。以前見たテレビで国内の鉄道全線に乗る旅をしている人がいたが僕には理解ができない。

月曜日の午前中に大阪に着くと数時間駅の周辺をうろついて、気を取り直して西鹿児島行の急行列車に乗る。明日鹿児島から船に乗れば眠っている間に沖縄に着く。小遣いは大阪まででほとんど使い果たしていた。残りは船賃だけだ。

火曜日、定刻通りに列車が西鹿児島駅に着けば何の問題もないが、一度だけ何かの理由で遅れてしまい、港に行った時には船はすでに出航した後だったということがあった。いつものように所持金はゼロに近い。キャッシュカードなど勿論ない時代で、沖縄へ電話をかけるにも簡単にはできなかった。明日の出航までどこか眠れる場所を探さなければならない。2月下旬のことである。外は身震いするほど寒い。南国鹿児島の市街地にも雪が残っていて道はぬかるんでいた。洗濯物にするはずの衣類を重ね着して駅の待合室のベンチで横になっていたら、駅員に「もう閉めるから出ていってくれ」と夜中に追い出された。外に出ると、駅前に公衆電話ボックスがあったのでそこで明朝まで過ごすことにした。風が入らないように新聞紙をまるめて隙間を塞いだが、底冷えは防ぎようがない。ボックスの中で足踏みしたり、口から出まかせの歌を歌って気を紛らわそうとするが、全く効果がなかった。そのうち水鼻が出てきて、鼻をかんでもかんでも止まらなくなった。ひどい顔になっていただろうと思う。今考えると穴があったら入りたいような気分であるが、あの時ほど時間の過ぎるのを遅く感じたことはなかったような気がする。夜が白々と明けてきて、車の走る音などで周囲が徐々に賑やかになってきたときは正直ほっとした。後日数人の友人にその話をしたが、案の定、同情してくれた奴は一人もいなかった。

僕と同世代の人に、当時の沖縄～鹿児島間の船中の思い出を訊くと、誰でも「船底の2等船室のムッとするような臭いには参った」とほぼ同じことを答える。それに耐えられなかった僕は、船室から毛布を持ち出して甲板のベンチでいつも寝ていた。

卒業後の研修は県立中部病院で受けることになったが、その時の通知には、赴任に必要な旅費は全て当方で負担するのでどのような手段で帰ってきてもよい、といった内容のことが書かれてあった。これを読んで、毎年悲惨な帰省経験を繰り返していた僕は、こんな時しか贅沢はできないと考え、最も速く、しかも楽に帰るにはどうしたらよいか考えた。熟慮の末、青森～東京間は特急寝台列車、東京～沖縄間は飛行機に乗ることに決めた。

そして…。大学生活最後の帰省は想像以上に素晴らしい旅だった。6年間ずっと急行列車の堅い座席に座って移動していた僕には、夜は横になれてしかもより速く走る特急寝台列車はまさに理想的な陸の乗り物だったし、生まれて初めて乗った飛行機は離陸の時にちょっと手に汗を握った以外は全く快適だった。短い短い1泊2日の旅だった。

その時以来、僕は船にも長距離列車にも乗ったことがない。

今どきの若いもんは…

中頭病院 内科・臨床研修部
新里　敬

「今どきの若いもんは・・・」と言うようになったら、年を取った証らしい（苦笑）。私の周りの同世代がそのフレーズを口にするのを聞いて、ついに私もその年齢に達してきたか、と嘆息した。

振り返ってみると、社会に出たとき、いや、学生のときからかもしれないが、私（たち）は「今どきの若いもん」だったと思う。1960年代前半生まれの私たちは、「新人類」とか「共通一次世代」と言われた。当時の西武ライオンズ黄金時代の中心だった工藤公康や渡辺久信らがその代表格だ。

従来の慣習やしきたりにとらわれず、自分たちの持っている独自の感性や価値観を打ち出していこうともがいていたのかもしれない。ただ、従来の慣習を壊しながらも、一方では体制維持に貢献するという、微妙なバランス感覚を持って仕事をこなしていた（それは今も変わらない気がする）。その上の世代とは異なった独特の感覚を持った私たちが、「今どきの若いもんは・・・」と言うのは、滑稽な感じがしないでもない。

そもそも、「今時の若いもんは・・・」というフレーズは、昔から使われてきた言葉のようである。1,200年以上前に建てられた法隆寺の塔には、「最近の若者はしょうがない」という意味の落書きがあるのだとか。エジプトで発掘された紀元前2000年の遺跡の壁には、「今どきの若い者は・・・」と記されていたそうな。

時代やその背景に関わらず、いつの世においても、年長者にとっては若者はよく理解できない存在なのだ。いつの時代でも、年長者は若年者を見て、そう言って嘆くのである。古今東西を問わず、年長者と若者たちの間にはジェネレーションギャップは存在するわけで、それをいちいち気にしてもしょうがない。

私たちもまた、今の若者を見て、同じように思い、「親の顔が見てみたい」という言葉がつい口をついてしまうのである。そのときには、鏡で自分の顔を眺めてみるのがよい。そろそろ、自分の子供たちがそう言われる年代になっているのだから（「新人類ジュニア」と呼ばれているらしい）。

論語の子路第十三に、次のような一節がある。「子曰く、其の身正しければ、令せずして行わる。其の身正しからざれば、令すと雖も従わず。」（孔子がいうには、上の人が正しいことをして民を率いれば、命令しなくても徳が行われるようになる。上の人が正しい行いをしていなければ、命令しても徳は行われない。）親、上司、政治家など、誰にでも当てはまると思う。まさに、子供は親の鏡であり、部下は上司の鏡であり、研修医は指導医の鏡なのである。“うちあたい”（あっ、それって自分のこと！・・・と決まりが悪い感じがしたときの島くとぅば）するのは私だけだろうか。

若者は、次の新しい時代を創る、未来の立役者なのである。彼らは、その時代に見合った、新たな価値観をもたらしてくれる。おそらく、私たちがそうであったように。ならば、彼らの存在価値を認め、彼らが成長して立派に生きていけるよう支援することが、私たちに与えられた役目ではないだろうか。

「今どきの若いもんは・・・素晴らしい！」

そう言えるようになるのが、そう言ってあげられるような子供や若者を育てることが、大人になった（はずの）私たち新人類世代が背負っている大きな課題なのだ。2008年に強い西武ライオンズを復活させ、プロ野球日本一に輝いた渡辺久信監督は、コーチ陣にこう徹底したという。「ベンチを見ながら野球する選手を作るな。」

自らの足で立ち、自らの頭で考え、自らの足で歩む若者を育てたい。そう願うのは、私が渡辺監督と同世代だからか。このようなことを書くと、先輩諸氏から「今どきの若いもんは、身

知らずの口たたきばかりだ」と、またお叱りを受けそうである。

だが、いつの時代も、きっと「今どきの若いもんは、素晴らしい！」はずなのである。そうでなければ、歴史の新しいページは開かれてこなかったのだから。

「沖縄単身生活の衣食住」

自衛隊那覇病院 院長
杉山　圭作

気がつけば、沖縄での生活が3回目で合計7年をこえ、その大部分を単身赴任で暮らしている。単身生活は当然、帰宅しても誰もいない。近所の夕餉の匂いと家族団らんの声が耳に入る。予定のない週末は誰とも会話がない。ピンポーンと玄関が鳴っても訪問者は「NHKみていますか？」「新聞取りませんか」で郵便受けに入るのはピザ屋のチラシだけ。仕方なしにテレビと「会話」。トレンディードラマは、若い人の名前と顔は覚えづらく、恋愛二股ものはどっちがどっちか混乱。視聴者の不安をあおるような「健康番組」は、不安になった患者の言うことを理解するため観ているが、やはり馬鹿馬鹿しい。眼が疲れて外に出て空を見上げると内地行きの飛行機が見える。次に帰るまで1ヶ月以上の長さに意気消沈。昔出稼ぎの人を「望郷労働者」といったがそれは確か冬以外は家族と一緒に農業できるだけこちらより好条件。それやこれやで落ち込んでいると抑うつ状態の単身赴任者が受診し、問診しながら同病相哀れむ状態。というところ始まった単身生活も長くなり、日々の重要な衣食住はもちろん、社交ダンスなど趣味生活までも充実してしまった。

着るものの洗濯、アイロン、ボタン付けはもちろん染み抜きもある程度完結。クリーニング屋では仕上がりはきれいだが、持っていく手間や脱落したボタンの代わりを探すのが大変。お湯を使わないと油脂成分の汚れの落ちない寒冷地での洗濯と違い、沖縄では楽々。ただし外干しは強い日差しで色が褪せるし、急な雨も大変なので室内干しが一番。高湿度でもエアコンを短時間かけると問題ない。

下着は30年以上前に聞いた衛生学の講義では「大手のG社のものが肌にやさしい。しかも購入しても使用前に一回水洗しないと保存薬品でかぶれる」といわれた。今ではいい素材のものが各社で出て、男性用でも高価なものもある。着用するだけでカロリー消費するという××ウォーカーは試したが、家でごろごろしていては無効だった。メタボ症候群で通院中の人の中には、かなり着古した下着を着ている人もいて「エンゲル係数が相当高いのかな？」と家内にいうと「私も病気になったときの通院用の勝負下着がない」といわれ買わされた。自分も若くないのでいつ病気で倒れるかわからないから、着るものにも心をつかうべきか。一方東京世田谷の病院にいたときは80歳を越えた女性が呼吸困難で来られ、戦国武将の鎧みたいに頑丈で、それだけでも換気障害の起こりそうな下着を着けておられた。正中部分にホックが多数あって脱がすのが大変。裁ちバサミで裂こうとすると看護師に止められた。「この補正下着は超高価で弁償させられたら大変。」物事は程々が肝心か。

現在食事は基本的に自炊せず平日は職場、休日は外食。以前は自炊していたが残飯に寄りつく巨大ゴキブリは嫌だし、さらに料理中、食事中、食器洗いのいずれでも缶ビール各1本飲んでしまえばアルコール依存症にまっしぐら。残すのは面倒と余計に食べるとカロリー超過。外食屋さんは安いし、おかずびっしりの「うちなー弁当」もうまいが高カロリー高脂肪なのが難点。朝から500円で食べ放題の店ではさらに食べすぎる。飽食中にメタボ患者さんにばったり遭遇は相互にまずい。沖縄の食事の塩分はどこでも控えめな点は寒い東北地方のよりまし。沖縄の大衆食堂はなぜか利益率の高い酒類を置い

ていないし持ち込みも禁止で、昼間から呑んでいる人を見て我慢ということはないのもよい。

自炊していたときに行った電力会社の料理教室は丁寧に基礎から教えてくれたし、一人暮らし用に保存法の工夫までアドバイスしてくれた。午後休みを2回取って通ったが2回とも、後半は鍋とか調理器具の洗いばかりやっていた。他の参加者に「洗う要領がいい」とほめられて余計そうなった。昔、大学の病理学教室で「形態学は汚いのは最悪」と器具の洗い方を厳しく指導された経験からか？

住まいはコンビニに近くてバス停かゆいれーる駅に近いのに限る。台風の暴風警報の中、コンビニまで行くのはつらい。夏のクーラー故障は暑くて眠れないが、業者さんも業務集中でなかなかきてくれない。しかしこの前、住んでいた北東北地方で真冬にストーブが壊れたときも大変で、寒くて眼がさめストーブをいじくって無理やりストーブをつけると煙と悪臭が発生し、寒空にむけ窓を開けると部屋はさらに寒く、煙でむせて咳が続いた。さらに早朝の雪かきはつらかったなあ。

顔がどう見ても内地顔で、多少のよそ者気分は抜けないが街中で道を尋ねられて、普通に答えてしまうと長く滞在していると自覚する。冬でも寒くなく、花粉症がないのはまことに楽。

医師としてもほぼ毎日どこかで生涯教育の機会があり、医師会ホームページをみるとすぐみつかる。身につく、つかないは別として多少は賢くなった満足感が得られ最高。今日もどこか勉強行こうかな。

祖先からの贈りもの

沖縄セントラル病院
瀬尾　駿

沖縄に転居して今年は10年目、県・市医師会の皆様にはお世話になるばかりですが、会報に随筆をとの依頼を頂き、事情はわかりませんが玉井修先生のご推薦ともあり、お受けしたものの何を書いたらよいものか迷いました。緑陰には相応しくないとは存じますがお許し下さい。

昨今国会議員の世襲制是非が取り沙汰されておりますが、医者の場合はどうでしょうか。私事で恐縮ですが、自己紹介を兼ねて、一やまとんちゅうの家系について調べました事を駄文と致しました。

那覇に転居する前は静岡県三島市に住まい、明治の頃祖父が病院を開設していた同じ場所で外科医院を34年開業、父は医師でしたが臨床医ではなく九州大学で生理学を一生の仕事としておりましたので、開業医としては一代途絶えはしましたが、祖父も父も瀬尾家の養子として医家を継承し全うした事になります。生前の母からは常々瀬尾家は代々藤堂高虎（1556～1630）を祖とする伊勢国津藩藤堂家の御典医であったと聞かされておりましたが、確かな根拠を知らずお話として聞き流しておりました。昭和61年父が平成5年母が他界し昔を知る証人は失われて、藤堂家との縁は遠退くばかりでしたが、三島の家には古色蒼然とした立派な仏壇があり、先祖の位牌と共に過去帳なるものが祭られている事は子供の頃から知っておりました。しかし母の存命中はそれを手にする事など到底許されるはずもなく、母の葬儀をすませて5年程後の事でしたが、三島市医師会五十年史編纂を手伝わされた折、祖父の三島での開業歴の事もあり祖先を知る唯一残された記録を調べる事になりました。それには「瀬尾氏累世過去牒」とあり、38名の戒名と死亡年月日年齢が

日にち別に分けられ筆書きされており、最も古い戒名は元禄11年没（1698）の女性、次は男性で寶永3年没（1706）ですがどちらも年齢と俗名は書かれておらず、その後は童子・女性・女性と続き、6番目が享保19年（1734）正月に亡くなった53才の男性、以下年代順に童子・女性・女性と続き、10番目は天明3年（1783）77才没の男性、次に亡くなった男性は15番目で文化9年（1812）63才没とありました。過去牒2番目に亡くなった男性の年齢はわかりませんが、仮にこの男性を含めて前記6・10・15番目迄の男性諸子が藤堂家の藩医であったとするならば、慶應3年（1867）没の27番目の男性である曾祖父は五代目の医師に数えられてもよいのではないかと思われます。16番から26番迄は全て女性か童子ばかりで、21番目の天保14年に亡くなった女性の戒名には五代目立元母（立元は曾祖父の俗名）と小さく添書きしてあり、これが根拠となったものか、曾祖父・祖父・父の戒名にはそれぞれ五世・六世・七世の添書きが残されておりました。祖父は嘉永3年の生まれで、除籍原本によれば萬延元年10才で曾祖父の養子となっており、静岡県の医史と医家伝（土屋重朗著昭48年刊）によれば明治12年東大医科別課卒、明治10年三島に設立された養和病院に16年赴任し、病院長・警察医を兼ねたとあります。母の思い出話によれば東海道・箱根山を駕籠でやって来たらしく、後に病院と土地を買いとり大正7年69才で亡くなる迄医業を続けたそうです。現在祖父母一族と両親の墓は三島の菩提寺に祭られておりますが、曾祖父母一族の戒名には伊勢国津専琳寺と添書きがあり、この寺の存在を確認出来ましたので、住職に事情を話し祖先供養の法事をお願いしました。曾祖父が亡くなった慶應3年は徳川慶喜の大政奉還、続いて明治維新、大正、昭和に入ってからは第二次大戦の戦火など一世紀半程の年月を経ており、何かを期待するのが無理な事は承知の上で、平成18年9月関西空港から電車を何回も乗り継いで三重県庁の所在地津駅に到着、子供ら三名と合流して先ずは伊勢神宮に参拝（外宮のみ）、翌日車で専琳寺に向かいました。津市は藤堂家の城下町ですがお城はなく、城跡だけの大変に静かな街並みでした。寺には浄土真宗西本願寺派万松山専琳寺の門柱があり、古びた本堂と小さな鐘楼、桜の老木と寺の由緒を唯一偲ばせるような銀杏の大樹が繁っておりました。しかしお墓は見当たらず、本堂内の仏壇装飾等も極めて簡素。読経のあと住職とのお話にも最後迄瀬尾家に関する情報は聞かれぬまま法事を終えましたが、寺に居る間は何か温かな懐かしい雰囲気に包まれているようで、いつ迄も去り難い思いで過ごしました。一度は尋ねてみたいと長年の願望がそうさせたのかもしれませんが、伊勢の国に古寺だけでも残して下さった遠い祖先の存在を、何か強く意識した事も初めての経験でした。

孫子と経営科学

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
医療情報科（放射線科医）　玉城　聡

私は生来機械いじりが好きで、コンピューターにも興味を持ちその延長で放射線科医となりそして医療情報の責任者ともなった。なったからには「情報」という言葉に敏感でなければとある情報セミナーに参加したら、そこですっかり忘れていた孫子に出会った。孫子はご存じの通り「彼（敵）を知りて己を知れば、百戦して殆（危）うからず。彼を知らずして己を知れば、一勝一負す。彼を知らず己を知らざれば、戦う毎に必ず殆うし。」と説いた2,500年前の中国の兵法家である。この文章の現代語訳は「敵情を知り味方の状況も把握すれば百戦しても危なくないが、敵情を知らず味方の状況しか把握できなければ五分五分である。敵情も味方の状況も把握していなければ戦うたびに必ず危ない。」とのことで、この有名な一節は若かり

し頃はどうということなく受け流していたが、戦いや敵等の表現を仕事に置きかえて解釈すれば現代でも十分以上に通用することとなり、情報にたずさわる私には紙すらない古代から「情報」という抽象概念が重んじられていたことに強烈なインパクトとそしておおいに励みになった。また孫子は「兵法は、一に曰く度、二に曰く量、三に曰く数、四に曰く称、五に曰く勝。地は度を生じ、度は量を生じ、量は数を生じ、数は称を生じ、称は勝ちを生ず。」とも述べており、現代語訳は「ものさしではかり（度)、ますめではかり（量)、数えはかる（数)、くらべはかる（称)、勝敗を考える（勝）ことで、戦場の広さや距離を考え（度)、その結果で必要な物量を考え（量)、その結果から兵数を数え（数)、その結果から敵味方の能力を考え(称)、その結果から勝敗を考える（勝)。」というように、戦略は占いや君主の思いつきでなく「数値」を基に環境や資源を把握しておこなえと述べている。びっくりである。孫子はその他にも幅広い事柄を多数述べているが例えば「言うとも相聞こえず、故に鼓鐸（こたく）を為る。視すとも相い見えず、故に旌旗（せいき）を為る。」(現代語訳「言っても聞こえずだから太鼓を使う。示しても見えないから旗やのぼりを使う」）の一節とこの続きは、世間で最近よく言われる「見える化（可視化)」を喝破しており時代を超えたその普遍性に驚くばかりで、これまで戦国合戦で立回りの邪魔じゃないかと疑問だった武士や足軽の背中の物干し竿のように長い旗指物や、自らの居場所を敵にも知らせながらの太鼓やどらの打ち鳴らしや夜のかがり火が、実はただの合図や目印にとどまらず組織行動や士気高揚のための可視化道具でもあるのだという奥深さに無線機や携帯電話と単純比較しかできなかった自分の了見の狭さを知らされた。これらは孫子のごく一部に過ぎないが、そうこうしているうちに今度は「経営科学」に出会った。経営科学とはオペレーションズ・リサーチ（operations research OR）とも呼ばれ、その誕生は第二次世界大戦においてイギリス軍がドイツ軍のロンドン空襲や潜水艦のUボートに対抗するために軍人以外に数学者や物理学者などの科学者チームを立ち上げて数学的戦略を取り入れて目覚ましい成果を上げ、戦後は米国でコンピューター科学と結びつきながら線形計画、システム最適化、在庫管理、待ち行列、需要予測、シミュレーションそして意思決定論などと幅広く発展していった。日本ではQC（品質管理）が先行したので経営科学への注目は弱かったが今はQCと経営科学が融合しながら広がってきているようだ。もちろん病院でも医学統計やQC活動はそれなりに見聞きするがとても病院の日常業務に活用されているとは言い難いし、また今の100年に一度の経済大不況の原因も金融工学じゃないかとの思いもあってこれまでは企業の手法は病院には業態が異なりすぎてあまり役立たないと考えていた。しかしこの経営科学の立ち読みは（入門書。専門書は高等数学の羅列で私には理解できない)、患者さんの診察待ち分析など病院への応用例や、その後にワインの出来具合い予測や映画の興行収入予測、大リーグの松坂投手の獲得、警察の犯人の所在予測など一見数値化できない分野でも専門家と対等の活用例を知ることとなり、経営科学は企業幹部だけでなく病院現場の最前線にも広く有効な手法だと考えるようになり、今では金融工学も包丁のごとくで問題は使う人間のモラルだったと受け止めている。結びとしては、私は病院でもKKD（経験、感、度胸）以外に、古典の孫子と先端の経営科学の手法が二重らせん的に交錯しながら、多忙さで燃え尽きてゆく医師や看護師らの業務改善など診療現場の最前線でも広く役立つ実学だと確信するようになったしだいである。

参考文献

酒井英之著「孫子に学ぶ情報セキュリティ」　sky社
多田実ら著「Excelで学ぶ経営科学」オーム社
イアン・エアーズ著「その数学が戦略を決める」
文芸春秋社

セーリング

那覇市立病院
寺田　泰蔵

私とセーリング（ヨット）との出会いは、学生時代にヨット部の同級生に誘われて生理学教室の准教授先生のヨットに乗せてもらったのが始まりです。在学中何度か乗せていただき、言われるがままにロープを引っ張り、巻き挙げ（体力がありそうだから肉体労働要員？）ていましたが、ヨットが海の上を進んでいく爽快感は何にも変えがたいものでした。目的地は2時間ほどセーリングして行く貝料理屋（入り江に浮いており直接ヨットを桟橋につけて入れるお店でした。）で、海賊焼きをご馳走になったことはよい思い出です。

卒業後は首都圏の大学病院救急部、救命センターで仕事に没頭し、昼も夜もないような生活をしながら十数年、なぜか学生時代のヨット体験が忘れられず、いずれはヨットに乗りたいなど考えながら暮らしていました。

縁あって那覇市立病院へ就職し沖縄に住み始めてから、「こんなきれいな海が身近にあるのなら」と考えながらも、船については自動車のように中古船店があるわけでなく、どうしたら自分の船が持てるかもさっぱりわからず過ごしていたある日、当時たまに食事に行っていたワインバーのシェフより知り合いの人のヨットに乗せてもらったお話を聞き、またその船が売りに出ているのを聞いて宜野湾マリーナまで見せてもらいに行きました。船はベネトウというフランスの会社の37フィートの立派なヨットでしたが値段も手が届かず、また私には大きすぎる船で残念ながらあきらめて帰ってきました。その時船のオーナーさんに「この船だと船舶免許は一級が必要、後々のことを考えても一級を取っておいたほうがいいよ」といわれました。当時船舶免許制度が変更となり、数年前に四級免許を取得していた私は自動的に二級船舶免許となり、また二級免許を取得すると講習と筆記試験の追加のみで一級免許が取得可能となったため、がぜんやる気をだして休みを使って3日間の講習に励んで免許を取りました。その後はまた熱も冷め、まあいずれ一度は船を持ちたいけど退職してからのお楽しみでもいいかななどと考えながら過ごしていました。そんなとき偶然インターネットのヨット売り買い情報で沖縄からヨット出品があり、早速オーナーさんへ連絡、試乗させてもらうこととなりました。船は30フィートのヤマハの船で船齢は30年弱と古い船ですが、スカンピの愛称で知られる当時人気を集めたヨット（前のオーナーのうけうりですが）でとてもよくメンテナンスされており、その上しばらくは操船も教えていただけるとのことで、格安で譲り受けることとなりました。それからおっかなびっくりの接岸、離岸練習、艤装の準備、ヨットスクール（沖縄でも受講可能です。）まで受講し、最近なんとか一人で海に出て帰ってくることができるようになりました。また知り合いのヨットと一緒に行った一泊二日の慶良間旅行は、普段行くことの出来ないようなとても美しい入り江などに寄ることができ大変楽しい思い出となると同時に、帰りは海が荒れてなかなかのアドベンチャーにもなりました。始めるまではヨットを持つような人とはいったいどんな人たちだろう？・・・何か浮世離れした人たちの集まりではないか・・・などと少し心配していましたが、実際マリーナで知り合いになった人たちを見回してみると、公務員、銀行員、消防士、元自衛官、ドクターなどバラエティーに富んでいます。ヨットという共通の趣味を通して、いろいろ教えていただいたり、異業種交流もとても面白く新鮮です。昨年はメンテナンスのため4ヶ月ほど船を陸に上げ、エンジンの取り換え、電気の配線や船底のメンテナンスを行いました。また最近漁船と自衛艦との衝突事故などもあったため、やはりほ

かの船舶と無線通信を行えるようにしなくてはと思い立って第一級海上特殊無線技士の資格を取得し、国際VHF無線局を開局しました。エンジンの取り換え以外はまわりの人にいろいろと教えてもらいながら少しづつ自分で手を加えていますがこれもヨットの楽しみかたの一つと思い、天気の悪い休日はメンテナンスに励んでいます。仕事の都合で船を出すのは月に1～2回程度ですが、細く長く続けていければと思っています。

本当にあった話

敬愛会 ちばなクリニック
仲里　聰

今までに見たり聞いたりした話で、細部はともかく、本当にあった話を紹介したいと思います。

小話その1；坐薬

これはよくきく話である。20年以上前のこと。ある先生が70歳代の男性の透析患者さんに坐薬を処方。後日「○○さん、この前だした坐薬はどうでした？」ときくと、「いやー先生、ちゃんと座って、正座して飲みましたけど、飲みにくい薬ですね」と答えたそうだ。処方した先生は目が点になったが、もちろん坐薬の正しい使い方を教えたとのこと。

小話その2；鼻出血

県立名護病院（現：県立北部病院）にいた頃に耳鼻科のA先生から聞いた話。やくざの親分さんか幹部の人で、鼻血が止まらないので救急室へ。止血処置したが、だいぶ出血したようで、A先生が「かなり出血していたけれども、きつくなかったですか？」ときいた。「くらくらしていたが、子分達の前でそんなこといえるか」といったそうだ。幹部はつらい。

小話その3；シャント穿刺

やくざの方でも腎不全になり、透析を受けないといけなくなることがある。透析のためにシャントを作成し、そのシャントを穿刺して透析を行うが、ペンレステープ（術前や透析時の穿刺痛に対するリドカイン含有の麻酔テープ）がない頃の、ある透析施設でのこと。やくざの幹部や親分さんになるとやはり面子があるのか、穿刺の際、決して痛いとはいわない。スタッフが穿刺に失敗して刺青の下に青痣をつくったり、血腫で刺青が歪んだりしても怒鳴ったり、痛いとかいわないという。しかし、あるスタッフが何度も穿刺に失敗すると、さすがにすごく睨まれ、一瞬、「今日は無事に帰れるのかしら」と思ったそうである。

小話その4；寄生虫

検便についての話である。便を提出しないといけないが、便がでないので代わりに犬の便を提出したら、人間に犬の寄生虫がでたと大騒ぎになったという話をきいたことがある。それとは別の話で小学校5年生の時のことである。一般の検便の他にも、朝起きたら肛門にテープを貼って、それをはがして提出するという、蟯虫検査もあった。当時はプライバシーなどなく、寄生虫がみつかったら、○○君、虫がいたからと駆虫薬を渡されていた。この時、同じクラスの男子2名がひっかかった。喜瀬君と伊集君だった。きせ君といじゅ君→きせいじゅ→きせいじゅう→きせいちゅう。きせいじゅうがきせいちゅうとクラスで若干話題？になっていた。

小話その5；痰培養

中部病院でレジデントをやっていた時のこと。咳がでる、少し黄色い痰がでて治りが悪い。その頃は煙草も吸っていた。痰のスメアと培養はインターン、レジデントには重要な検査であった。痰の色がよくないので当然、痰培養を提出した。1週間位で培養結果が返ってきたが、なんと緑膿菌であった。しかも耐性菌。コロニーゼーション？、もうCOPD？、ちょっとまずいかなと思っていた。しばらくして同期のI君が痰培養どうだったときいてきた。何故

痰培養を出したのを知っていたのかと思ったら、培養結果のレポートをたまたまみつけて、菌と感受性を適当に書いて本物と差し替えたと。本当は菌などでてはいなかったのである。

小話その6；心マッサージ

これも中部病院時代のこと。シニアレジデントとジュニアレジデントと一緒に回診をしていた。ICUを回診していた時、近くのベッドで警報がなった。心電図モニタをみるとフラットになっているではないか。すばやくシニアレジデントが心臓マッサージを始めた。その瞬間、心停止のはずの患者さんが「あ痛っ！」と声をあげた。電極がはずれただけだったのだ。

小話その7；セロハンテープ

70歳代の女性。慢性腎不全のため週3回の血液透析を行っている。ある日、左前腕シャント肢にセロハンテープを貼ってきていた。ナースは特に気にせず、こんなところにセロハンテープを貼ってと思い、剥がしていつものように穿刺をして透析をはじめた。次の透析の時もセロハンテープを貼ってきていた。前と同様にセロハンテープを剥がし、穿刺をして透析を始めた。その後も同様のことが続いたので、ナースが「○○さん、なんでいつもセロハンテープ貼ってくるの？」。その患者さん曰く、「なんで、みんなテープ貼っているさー。テープ貼ると痛くないってよ」。他の患者さんが貼っていたのはペンレステープであったが、テープなら何でもいいと思っていたらしい。

毎日をワクワクに過ごす方法とは

医療法人友愛会 豊見城中央病院
比嘉　盛丈

ワクワクと心躍らせながら、幸せいっぱいな気持ちで毎日を過ごす方法について考えたことはありますか。私は（普段はあまり楽しそうな表情をしていないかもしれませんが）、多くの日をワクワクと過ごしています。どんな時にワクワクしているのか、そのあたりを自分なりに少し分析してみました。かなりレベルの低い考察なので、お時間に余裕のある方だけ、寛大なお気持ちをもって読み進めていただけると幸いです。

さて、私は医学生の頃に一時期（？）よく麻雀をしていました。上手い人からみると決して理論的な打ち方ではなかったようですが、なぜだか自分の欲しい牌を引き寄せることができたので、勝率だけは非常に高かったのです。ある日、プロ級といわれる先輩と打つことになりましたが、そのときも引きが強く、さらに裏ドラがよくのって、勝つことができました。そのとき先輩が「お前はたかが麻雀にこんなに運を使っていたら、近い将来に運を使い果たすだろう」と予言され、その場が大爆笑になりました。その当時の私の運勢はかなり強く、エレベーターに近づけばエレベーターの扉が開き、信号機に近づけば信号機は青に変わりました。私の前にある道がどんどん開かれていくのを間近に見ていた友人の一人は、私の本名であるもりたけを文字って「ひがモゼたけ」君と呼びました。そのモゼとは、旧約聖書に出てくる、海を開いて道を作ったあのモーゼのことです。当時はなすこと全てがまさに運だけで成功していたので、友人にも「お前の人生は本当にこれでよいのか」と（冗談まじりに）よく言われたものでした。まーそうは言われても、心機一転して運に頼らない実力を身につけるぞみたいな上向きの発想を私は全く持ち合わせていませんでした。ここから本題に入ってみたいと思います。図1をご覧ください。皆さんが一人だけの空の旅をしているとすると、何番の空席を予約しますか。私はゆったりと座りたかったので、迷わず2番を予約しました。まあ5番でもよかったのでしょうが、2番の近くに3番があることで、視覚的に2番の方がゆったり座れる可能性が高いだろうと判断したのだと思います。ここで問題にしたいのはその後です。実際に搭乗する

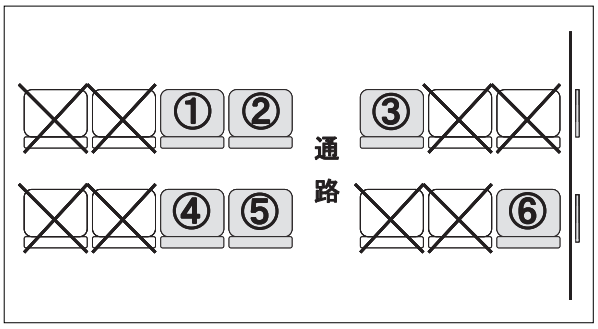


図1：飛行機内空席状況

と、修学旅行生もおり機内はごった返していましたが、なぜだか自分はゆったりと座れるような気がしてワクワクしていました。この状況からどのような方法でゆったり座れるのか、まるでミステリーを読み進めているような感じでした。予約した2番の席に近づくと、隣の1番には外国人の男性が座っていました。あれあれ1番は空席にならなかったのかと思っていると、3番に座っていた女性は1番に座っている男性の妻だったようで、2番の場所と代わってもらえないかとお願いされました。了解して代わってみると、3番のとなりに座っていたのは小柄な日本人女性で、しかも窓側に座っている夫の方に寄り添っており（新婚のようでした）、ゆったりと座ることができたのです。私はこの時に自分はなんて運がいいのだとすごく幸せな気持ちになることができました。もしも最初から3番を選んでいたら得られなかったであろう幸せ感だと思いました。これこそが今回ここで御紹介したいプチ奇跡です。（奇跡とは常識では起こるとは考えられない不思議なできごと：国語辞典、旺文社）。私の予想（期待）、すなわち私の常識というべきものは、ほとんどが実に浅はかなので、それらのほとんどを現実が軽がると超えていくのです。このように幸運とは常に私の力の及ばないところで起こります。まさに裏ドラがのった時のような気持ちです。このようなワクワクした気持ちを存分に味わうには、まずは期待するということが大切です。この場合だと、2番の席でゆったりと座れますようにと祈るような気持ちをもって現実を待つこと（期待）がそれに該当します。さらに、与えられた結果（現実）を感謝の気持ちをもって受け入れることも大切だと思います。逆説的にいうと、5番の席を選んでいたらどうなっていたのだろうというような気持ちをもって、すでに座っている3番の席から5番の席を振り返らないことも大切なのかもしれません。（ちなみにこの話はついさっき機内であった実話なのです。話のネタが与えられたことにも感謝です）。私はいつも色々なことに期待しています。私は、私の浅はかな期待や予想なんて、簡単に（時に良い形で）外れてしまうことを知っています。外れてしまうことも含めて次の展開を楽しみにしているのです。（多くのゲームは負けても楽しいものです）。心配の場合も同様によく外れるので、明日を思い煩うよりも、私なりに事を尽くしたら天命を楽しみに待つことにしています。自分の予想のあたる確率を過大評価すると不安も大きくなるのではないでしょうか。大丈夫！私たちの予想はだいたい外れるのです（笑）。

研修医の耳に念仏、研修医の耳にタコ

那覇市立病院 放射線科
又吉　隆

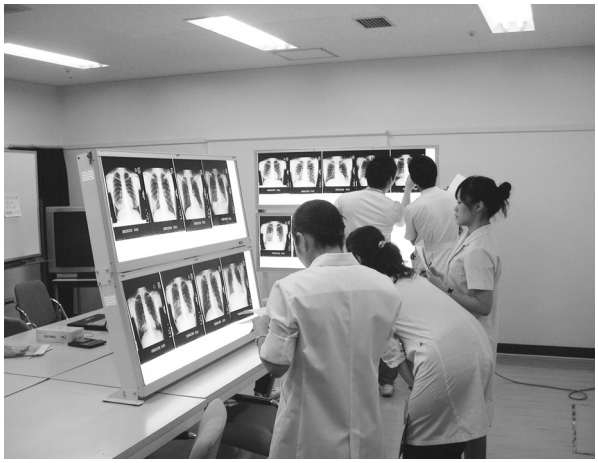
今年は空梅雨になりそうな気配だ。晴天の6月を迎え1年目初期研修医も病院という職場に慣れ余裕が出てきたようである。当院でも充実した教育で彼らの医師としての技量向上を図っており放射線科では1年目研修医を対象に毎週1回救急疾患、胸部単純写真の画像診断を講義している。講義の流れは該当疾患の大まかな説明のあと症例のフイルムを提示し研修医が画像所見を拾い上げるといういたって普通の内容である。では例えば虫垂炎の画像を1回詳しく解説し症例を数例提示すると翌日から彼らが虫垂炎を的確に診断可能かというとそれは当然無理である。ある研究会で慶応大学から研修医はミ

ニレクチャーを受ける前後で画像所見の拾い上げに変化がなかったとの報告がなされた。これまでも“えっ、この所見は教えたはずだが？”と絶句することが度々あった。1回教えるだけでは駄目なのだという境地になったのは研修制度が始まって3年目であった。こうなると研修医の忘却スピードが速く念仏で終わるかしつこい講義で耳にタコができるか根競べである。そのため講義内容が印象に残るように手を替え品を替え工夫をしてきた。

講義は早朝午前7時開始なのでプリントを配り座学で説明を始めると必ず誰かが眠り始める。視覚に訴えるスライドを多用し小マメに質問しながら考えさせる工夫をしないと深夜まで勤務し早朝から採血をこなした彼らに寝るなというのは酷である。座らせて駄目ならば立たせようということでシャーカステンの前でフイルムを読影させると居眠りは無くなった。しかし議論が活発化したがここでも大人数だと半数はあぶれてしまう。5枚掛け2段のシャーカステンでは詳しく画像を見ることができるのは最大6人までである。7人以上は後ろから単に写真を眺めているだけ終わってしまう。画像診断でフィルムを詳しく見ることができなければ寝たほうがよっぽどましだ。そこで3年前からは研修医12名を前半後半2グループに分け5ヶ月交代で同じ内容の講義をすることにした。シャーカステン前は適正人数となるし研修医も内科系・外科系、離島・大学研修など各自のローテーションに合わせ受けたい時に受講できる。

フィルムを見せ画像所見をまず研修医に拾い上げさせる。シャーカステン前の数人で相談させるのもよく1人が所見に気付くと互いに補い合いながら所見を絞り込んでくる。その後所見を詳しく解説する。画像は心霊写真と一緒で、心霊写真はそのままではどこが幽霊なのかさっぱりわからないがこんな形ですとか解説シェーマを見るともう幽霊しか見えなくなる。画像も同じく解説を聞くと所見が急に見えてくるものである。実際の臨床場面では無理だろうが講義中は所見探しを楽しんでほしいと考えている。数例提示して研修医の目が所見に慣れたところで講義終了となる。しかしこのままでは1か月もたたないうちに知識や画像所見はあやふやになる。日常臨床で典型例が見つかったらその都度症例を提示し記憶を引き戻さないといけない。急病センターなどである研修医が遭遇した疾患の画像は他の研修医の格好の教材となる。彼らは仲間意識が強く同僚が経験したことは明日は我が身と考えておりフイルムを提示し“A先生が当たった症例、君所見わかるか”と尋ねると身を乗り出して食いついてくる。これが1年先輩医師が当たった症例を出しても熱意は格段に低くなる。また目の前に人参をぶら下げる意味で所見を当てると食事を奢る約束をすると彼らは面白いほど熱心に読影する。難しい症例

シャーカステン前の学生を指導する初期研修医（左）。学生と研修医を一度に指導でき一石二鳥。



参加人数に合わせ同じフイルムとシャーカステンを2セット用意し余裕を持たせた。

に限っているのでわからないだろうとタカをくくっているが結構所見を当てられて懐の痛い思いをしている。

当然ではあるが講義を受けるよりも教える立場に立つことが本人の学習効果として最も有用である。前半後半に講義を分けた前半5ヶ月は脳外科研修医に脳血管障害の講義を担当させた。立派に後輩を指導することに味をしめて今度は当院で病院実習に来た琉大6年生を対象に胸部単純写真講習会を開き2年目研修医を講師に充てた。朝から夕方までぶっ通しで胸部単純写を見るのは疲れるがさすが20代の若さで乗り切ってくれた。研修医は見違えるように堂々と指導しており教えることで知識をしっかりと身に付けたようだ。研修医と学生とは2年しか離れていないが画像診断力には当然雲泥の差が付いている。当院で研修したレベルがどれくらいか学生へのよいアピールになるかもしれない。写真は講習会風景のもの。あと2回胸写の講習会を予定しさらに研修医の知識の地固めを行う。

以上が5年にわたる試行錯誤の研修風景である。研修制度も6年目であり半数近くが後期研修医で残ってくれた。彼らが読影室によく質問へ来るおかげで臨床医と放射線科医の意思疎通は非常に良好となった。彼らがよきパートナーに育ってくれることを熱望して止まない。

お知らせ

こんな電話にご注意を！！

勤務医師の実家に、宅配便会社の名を語り、「貴家のご子息・ご令嬢宛に日本医師会から、直接、本人に渡すべき届け物があるので、勤務先・住所・電話番号を教えて欲しい」などの“問い合わせ電話”が頻発しています。

本会が警察に相談したところ、「医学生時代の名簿を使った『振込み詐欺』に発展する可能性があるので、取り合わないことが大事」との回答でした。

会員の皆様は、くれぐれもご注意ください。

日本医師会